

自筆本『倭訓栞』増補の展開について

平井 吾門

○ はじめに

谷川士清（一七〇九—一七七六）が著した倭訓栞には、流布する整版本や活字本だけでなく本人自筆の写本が存在する。公開されている自筆本は編纂初期のものと思われる石水博物館蔵本一種であり、内容や体裁において整版本と大きな隔りがある。限られた状況ではあるものの、平井（二〇一—a b）では訂正状況の考察から自筆本文に複数の段階が有ることを示し、自筆本の中だけを見ても記述内容の変遷を追跡できる可能性を論じた。本稿は、その際に課題としていた増補部分の記述について改めて調査し、その性格についてまとめるものである。

本稿は平井（二〇一—b）の追調査となるため、調査対象を同じく「あ」部とする。平井（二〇一—b）では、近代に「あ」「え」部で刊行が終わったものの、近代国語

辞書の祖型とも言われる「語彙」との語釈の対照を意識した。特に「あ」部は編纂の最初期から手掛けられる部であるため、編纂意図が如実に表れていると考えられることと、語彙量が豊富なことから、倭訓栞の成立過程を調査するの

に有用であると考えられる。自筆本倭訓栞は、用箋に引かれた罫線により、大きく三つの領域に区別することが出来る。すなわち、罫線で行間が仕切られた本文部分と、用箋の上段空白部分、そして用箋左右の余白部分である（図参照）。自筆本倭訓栞の解題を示した三澤薫生氏は、自筆本の書誌を示す中で本文について以下のように記述している（三澤（二〇〇八））。

四周単辺、匡郭内、縦二十三・三センチ、横一七・四センチ。每半葉を上段（八・〇センチ）と下段（一五・二センチ）に分け、上段は無罫、下段は罫線二行と凡そ四行分の余白（表は右、裏は左に位置する。下段を罫線部・余白部と仮称）からなる印刷罫紙を用

上段部 余白部	あしのみまや、葦の丸屋 也まのぬき金等字體を 葦のみにてしらへたる也	魚と見えたり是疑らくは葦屋を釋り たるなるへし	あをによし 奈良の枕詞にらへり 葉に緑青吉と書り袖中抄にもむかし	奈良坂に青土ありと畫家の丹青に用る よし見えたりには土にはよまぬはその略也	あらかね 荒金の義、中士の鑄をさへり	よて荒金之士と廣げり真金に對す	あしを 日本紀に船をよみ倭名抄に 學をよめり足緒の義也	あしつを 鶏尾琴に着し緒をいふと 長尾唐符に見えたり是も足付緒の義也	あしつを 鴨尾琴に着し緒をいふと 長尾唐符に見えたり是も足付緒の義也	あしつを 鴨尾琴に着し緒をいふと 長尾唐符に見えたり是も足付緒の義也
------------	--	----------------------------	-------------------------------------	--	--------------------	-----------------	--------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------

以下、本文のある野線部と、増補部分である上段部・余白部との具体的な関係性について述べる。また、本稿でも、野線部、上段部、余白部それぞれの名称を踏襲する。なお、野線部内に付された小書き増補や欄外増補については用例が少ないため考察から割愛した。

一 問題の所在

自筆本では、仮名で掲げた見出しに対して、

ありそ 萬葉に荒磯の字をよめりらい、反り也

のように漢字表記や出典、語源説を示すことで語釈が完結している項目が多く、整版本のように多様な記述、特に、言い換えや客観的描写による語義説明はあまり見られない。平井(二〇一〇b)では、自筆本(野線部本文)と整版本の語釈を構成している要素を比較することで、「自筆本から整版本への変化は、整版本倭訓栞から近代国語辞書への変化よりも革新的であった」と論じた。この観点で自筆本の増補部分を眺めると、自筆本の野線部本文の記述と整版本の記述を繋ぐものとして、語義説明を含めた語釈の構成要素をバランスよく増やしていくものと想定できる。

また、平井(二〇一〇a)では、自筆本野線部本文の排列の特色について、全体として見れば不統一な排列ではあるが、隣り合った個々の見出しには音形や意味による類似性を指摘できる箇所が多く、土清が見出し語を連想的に

オ三				ウ三				所在
あり	あはれ	あな		あがむ	あがつ	あがた	あくた	所在 本文項目
ありざし 西土の書に新頭といふ新くりと透間なきいへりとぞ		あらし 所の名に菓木新枝など書り 下巻の巻にや○宿にあらきといふ 本巻の巻にや○宿にいへり阿彌言と書り 本巻の巻にや○宿にいへり阿彌言と書り 本巻の巻にや○宿にいへり阿彌言と書り		あらた 新さいふ有つる世あらたし とはあらたらしきの意也	あらた 新さいふ有つる世あらたし とはあらたらしきの意也	あらた 新さいふ有つる世あらたし とはあらたらしきの意也	あらた 新さいふ有つる世あらたし とはあらたらしきの意也	上欄部
●		●		●	●	●	●	語義
●		●		●	●	●	●	出典
x		●		●	●	●	●	表記
			あらたへ 古語拾遺に布への古語 也といへり 萬葉に布の布衣 とも見えて鹿布の舞也よて萬葉に あらたへのふちえともいへけるは 鹿布をいふ也	あらまし 欲有事をいふ 萬葉に欲 字を / ましとよめり	あらたむ 改をよめり新にするの 意也			余白部
			●	x	●			語義
			●	●	●			出典
			x	●	●			表記

ウ三		ウ三		ウ三		ウ三		ウ三		所在
あきたらず	あきない	あきける	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	所在 本文項目
	あきない	あきける	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	上欄部
	あきない	あきける	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	上欄部
	あきない	あきける	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	語義
	あきない	あきける	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	出典
	あきない	あきける	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	表記
	あきない	あきける	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	余白部
	あきない	あきける	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	余白部
	あきない	あきける	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	語義
	あきない	あきける	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	出典
	あきない	あきける	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	あきむ	表記

三 増補の体裁と排列について

自筆本倭訓栞の増補には、野線部への書き込みのほかに、大きく分けて上段部・余白部の二つがある。原則として、各々の枠内に文字列を収める意識があり、特に余白部では、野をはみ出すことは殆ど無い状態にある。一つの枠内に収まらない場合には、次の丁へと記載がまたがることもある。

上段部そして余白部にはともに「項目の追加」が見られるが、上段部にはさらに「野線部あるいは余白部への補記・追記」がある。余白部と上段部の特徴をそれぞれ述べる。

三―一 余白部について

余白部では、原則として野線部本文への追記が為されることはなく、三澤氏が「野線部と内容上連続することはない」というように、新たな項目を追加する用途で使われている。余白部で追加される項目は、「一八ウ あるかたち」「一九ウ あざむく」などが丁を跨いで記述されており、本文とは別に、独立した一連の流れを持っていることが分かる。

ただし、同一丁にある左右の余白部に繋がりは見られない。すなわち、丁の裏の余白部（左端）と丁の表の余白部

（右端）では記述が跨ぐことがある一方で、同じ丁の右端の余白部から左端の余白部へ記述が跨ぐことは無いようである。前者には「の義也」という最後三文字を次丁の余白部に送る例がある一方（一八ウ）、後者には「（と）いへり」の三文字を小書きして枠内に詰め込んでいる例が見られる（二一才）。製本後、見開きで見たときに自然な繋がりととなっている。

なお、余白部が本文と連続することがないのは事実であるが、余白部で記された項目と本文の項目との連関は完全には否定しきれない。項目と項目の排列を見ると、丁の裏にある本文の項目と意味が類似したり第二音節が共通したりする語が左端余白部から始まり、次丁表の右端余白部へと繋がり、裏の左端余白部ではまたその本文の項目と繋がる項目が連なっていくという構造を指摘できる。例えば、野線部本文に「あざ（）や「あへ」がある間の余白部に、「あはてる、あざみ、あざみとり」「あへず、あつもの、あへもの」の各項目が続いている。

また、丁によつては余白部が空白のまま残された箇所もあることから、その丁の野線部本文の内容から連想を紡いで項目を追加していった過程、及び新たな項目が連想されなかった様子が伺える。以上のことを総合すると、余白部への増補は、野線部の本文が完成して製本された後に為されたのではないかと考えられる。

三二 上段部について

上段部では、野線部への追記及び新たな項目の追加が行われる。また、野線部本文だけでなく余白部に追加された項目への追記も為されており、記述が成立した順序として「野線部↓余白部↓上段部」という流れを確認することができる。

上段部における行送りの状況は、余白部よりも複雑である。余白部のように袋綴で製本された見開きを基準として、丁を跨いで記述が続いている場合もあるが(二二ウ)、次丁の上欄部に十分なスペースがあるにも拘わらず、丁を跨がずに欄外にはみ出して記述を続ける場合もある(二七ウ)。また、丁の表から裏へと版心を挟んで記述が続くこともあり(二〇オ)、全体的に余白部よりも乱雑な状態である。

自筆本の野線部本文には、記述する際の原則として、「用例として短歌を一首そのまま引用した場合は、改行した上で、無理矢理でも一行に収める」「それ以外の場合は野線一行に文字一列を収め、たとえ残りが二〜三文字であっても行末に来た場合には次の行に送る」という取り決めをしていたと考えられる(平井二〇一b)。一方増補部分では、上段部・余白部ともに、小書きにして狭い箇所は無理やり詰め込む場合がある。体裁を整えて記述された野線部とは

異なり、増補部分は次の改稿・清書を踏まえた用例採取であったであろう。

なお、余白部の増補は右端から順に書き込まれているのに対して、上段部では、増補を入れる野線部や余白部の記述のすぐ上に書き込むのが原則である。そのため、上欄への記載は飛び飛びになっている。また、増補を入れない箇所既に他の記述がある場合には、上欄及び本文ともに「〇」の記号を付けて、離れたスペースに増補している例もある。

上段部で新たに項目が追加される場合には、原則的に野線部や余白部にある項目と関連するものが置かれる。音形や意味に繋がりを持たせており、余白部と同様に、既存の項目からの連想が大きな役割を果たしていたのではないか。

四 増補内容の特徴

増補された内容を、平井(二〇一〇b)で用いた【語義を客観的に示す語釈】【出典】【表記】の各要素に着目して分析する。【語義を客観的に示す語釈】とは、「今●●といふ」「俗にいふ●●」「●●の古語」「●●の枕詞」というような説明のあるもの、「鳥の類也」のように概念を示す言葉が付くもの、また、他の訓詁みへの言い換えがあるものや、単なる音合わせではない漢語による説明が為されているも

のが該当する。例えば、

あかねさす 萬葉に茜刺と書るは假借にて赤丹指の義

日の枕詞にいへり日邊の赤氣をいへり：

…(野線部二二ウ)

この「あかねさす」の例では、「萬葉に」という【出典】を示し、「茜刺」という【表記】がある。その後「赤丹指の義」という注釈があるが、これは単なる音合せの漢字表記であり、語の概念を知る語釈とは言えない。しかし、その後「日の枕詞にいへり日邊の赤氣をいへり」という記述により、語の意味を明確に掴むことができる。そのような記述を【語義を客観的に示す語釈】と分類した。

余白部では、八八の項目が追加されている。全体的に一つ一つの語釈が短く、二行以内に収める例が大半である。中には、

ありく 日本紀に歩行をよめり (一九オ)

あぢ 倭名に鱗をよめり味の義なるへし (二一オ)

のように、漢字表記を記すことだけで語釈とした単純な例もある。

その一方で、四割を超える三七項目では、【語義を客観的に示す語釈】が記述されている。

あまし 甘をいへり味の餘れる義なるへし〇俗に髪

のあまひ又は器物の蓋など緊密ならぬをあま

しといふ淮南子に大徐則甘而不固 (一六ウ)

あまえる 源氏物語に見えたり今も兒女子の和悦人

に媚るをあまえるといふ上の義なるへし (一

七オ)

右の例では、形容詞と動詞について、それぞれ口語的な使用法を具体的に述べており、現在に通じる意味用法の存在を知ることができる。

全体では五九項目に【出典】の記述があり、七二項目に【漢字表記】の記述がある。平井(二〇一〇b)では、自筆本野線部と整版本に共通する「あ」部一一五項目のうち、それぞれの構成要素がどのように変化しているか、以下のように示した。

自筆本

整版本

【表記】九五例(八二・六%) 一〇一例(八七・八%)

【出典】七一例(六一・七%) 九〇例(七八・二%)

【語義】二六例(二二・六%) 七一例(六一・七%)

【【出典】と【漢字表記】に関しては、自筆本野線部の段階でそれぞれ高い割合で現れている。一方、【語義を客観的に示す語釈】について見ると、整版本に至る段階で割合が急激に上がることが分かる。余白部の調査では、八八項目中、以下のようなになる。

【表記】 七二例(八一・八%)

【出典】 五九例(六七・〇%)

【語義】 三七例(四二・〇%)

語釈態度としては自筆本と整版本のちよūd中間的な位置にあると言えよう。

上段部では、上述の通り「新たに追加された項目」と「既存の項目への追記」に分かれるが、それぞれの構成要素を分析する。

まず「新たに追加された項目」は六八例あり、各要素は以下のようになる。

【表記】 五三例(七七・九%)

【出典】 四二例(六〇・八%)

【語義】 四三例(六二・三%)

【漢字表記】や【出典】の割合がやや控えめであるのに対して、【語義を客観的に示す語釈】が多いと言えるであろう。

また、「既存の項目への追記」についても同様に分析する。

なお、この場合には、追記を受ける既存の項目にどの構成要素がどの程度含まれるかを示す必要がある。既存の項目へ追記があった例は四三例であり、その既存の項目における構成要素の割合は以下のようになる。

【表記】 三八例(八八・三%)

【出典】 三三例(七六・七%)

【語義】 一一例(二五・五%)

の段階では、「あ」部全体の割合と大きな齟齬はないといつてよいだろう。

次に、追記の部分における構成要素の割合は、四三例中以下のようになる。

【表記】 二四例(五五・八%)

【出典】 三三例(七四・四%)

【語義】 一七例(三九・五%)

ここでは、【出典】の割合がやや高いほか、【語義を客観的に示す語釈】も高い。

この二つを総合して、追記を含めた語釈を分析すると、以下のようになる。

【表記】 四一例(九五・三%)

【出典】 四〇例(九三・〇%)

【語義】 二三例(五三・四%)

この結果、【漢字表記】と【出典】についてはともに九割を超え、【語義を客観的に示す語釈】についても過半数を超えた。既存の項目に足りない部分を追記がうまく補っていた様子が見て取れる。特に、客観的な語義説明についても積極的に行われたと言えるのではないか。

なお、上段部の増補では同音異義語に言及することが多く、語釈の幅を広げているのが特徴的である。例えば、「あし」という項目は、野線部では

あし 足をいふいやししいや反あ也

と「足」の意味だけを挙げるが、直上の上欄部には

葦ははじめの訓也といへり開闢の初生れしたるは葦也
よて葦原の国ともいへり

の増補が為され、「足」の同音異義語である「葦」が追加されている。

五 まとめ

上段部及び余白部という増補部分において、見出し語の音形や意味による繋がりや並列の中に見ることが出来る。

新たな見出し語が追加される際には、野線部の本文と同様に、連想による言葉の紡ぎ出しがあつたのであろう。本文を推敲していく中で生じた新たな見出し語を、まずは余白部に書き込んでゆき、それを再度推敲する中でさらに上段部に追加していった経緯が伺える。

ただし、野線部を執筆していた時のように、ただ連想を繰り返していったわけではない。倭訓栞の自筆本と整版本の間には、分量や体裁だけではなく、語釈の構成に大きな変化があつたわけであるが、自筆本の野線部本文と増補部分とを比べてみると、増補部分では「より客観的な記述を旨指す」という整版本における語釈態度の萌芽を認めることができる。

自筆本の野線部本文に比べると、新たに追加された項目

も既存の項目への追記も、ともに【語義を客観的に示す語釈】を充足させていく形で増補されていくことが見える。

より細かく見れば、余白部における語釈よりも上段部における語釈の方が、更に高い割合で客観的記述をする傾向が指摘できる。結果として、以下のような流れで客観的記述が増加していた。

自筆本野線↓余白部↓上段部追記+野線部↓上段部追

加項目↓整版本

以上ことから、連想で言葉を紡ぎつつ増補を重ねる中で、より多角的な記述を心がけていく変化が見出せると言える。

自筆本において、漢字表記と出典のみで語釈を終了としている例が多数あることを見れば、もともと倭訓栞は和訓に対して漢字表記を示すことを第一義の辞書として編纂が開始されたと見ても良いであろう。しかし、最終的に整版本で提示された姿は異なり、より複雑な体系を持つものとして成立している。自筆本における増補は、自筆本と整版本の本文間を繋ぐものとして、最終的に整版本が目指した方向に向かう途中過程を示す材料であると言える。

〈主要参考文献〉

北岡 四良（一九六八）「倭訓栞成立私考」（『皇学館大学紀要』六）

北岡 四良（一九六九）「続倭訓栞成立私考」（『皇学館大学紀要』七）

北岡 四良 (一九七二) 「土清と宣長」 (皇学館大学紀要) 一〇)

北岡 四良 (一九七五) 「土清をめぐる人々」 (上) (皇学館論叢

八二)

谷川士清生誕三〇〇年記念事業実行委員会 (二〇一〇) 『土清さん』

谷川士清先生事蹟顕彰会 (一九一一) 『谷川士清先生傳』 (大日本図

書)

平井 吾門 (二〇一〇a) 『倭訓栞』研究の課題と展望 (東京大学

国語研究室「日本語学論集」六)

平井 吾門 (二〇一〇b) 「倭訓栞の成立過程について——語釈の発

展を中心に——」 (第一〇三回訓点語学会研究発表、於・東

京大学)

平井 吾門 (二〇一一) 「谷川士清自筆本倭訓栞の掲出語の排列につ

いて」 (東京大学国語研究室「日本語学論集」七)

平井 吾門 (二〇一一b) 「自筆本『倭訓栞』の排列について——シ

ソーラスから辞書へ——」 (第一〇五回訓点語学会研究発表、

於・東京大学)

三澤 薫生 (二〇〇六) 「谷川士清自筆『和訓栞』について」 (和洋

国文研究」四一)

三澤 薫生 (二〇〇八) 『谷川士清自筆本倭訓栞 影印・研究・索引』

(勉誠出版)

山本 真吾 (二〇一一) 「国語学史上の谷川士清」 (『土清さん』谷川

士清生誕三〇〇年記念事業実行委員会)

湯浅 茂雄 (二〇〇二) 『訂正増補 和英英和語林集成』『和英の部』

の増補と『和訓栞』『雅言集覽』『官版 語彙』 (『国語学』

五三)

(ひらい あもん 大学院人文社会系研究科 博士課程四年)